

2024年大河ドラマで注目が集まる紫式部とは何者か 物語の内と外から読み解く『源氏物語』

安藤 徹：龍谷大学副学長、文学部教授／龍谷ミュージアム館長

2024年のNHK大河ドラマ「光る君へ」の主人公は、平安時代中期に『源氏物語』を生み出した紫式部です。脚本を担当する大石静さんがどのようなストーリーを紡いでいくのか、吉高由里子さん演じる紫式部と柄本佑さん演じる藤原道長を中心にどのような人間模様が描かれるのか、大きな期待が寄せられています。

『源氏物語』は最も有名な古典文学の一つで、これまで幾度も映画やドラマなどとして映像化されてきました。しかし、作者である紫式部がどのような人物だったのか、分かっていることはわずかにすぎません。いつ生まれ、いつ亡くなったのかも不明ですし、実名も未詳です(「紫式部」は『源氏物語』の登場人物にちなんだペンネームのたぐいです)。そうした謎多き紫式部を知る手がかりとして注目されてきたのが、『紫式部日記』です。まずは、この日記から浮かび上がる紫式部像を探っていきたいと思います。

なお、日記から読み取れる「紫式部像」が実在の人物とイコールになるとは限らない点には、十分注意する必要があります。日記における紫式部は、あくまでも日記の表現世界において造型された人物であり、自己成型した姿なのです。とはいえ、私たちにとって『紫式部日記』が貴重な情報源であることはたしかです。大事なのは、「紫式部はどのような人物か」ではなく、「紫式部はどのような人物として造型されているか」と問うことです。さらに、そのような造型が『源氏物語』の作者像とどのように切り結ばれていくかを考えてみることです。

後半では、私が構想している「物語社会学」という立場から、『源氏物語』の卓越性を解き明かす手がかりを探ります。

千年ほど前に作られたこの物語は、多くの人を惹きつけ、さまざまな文化を生み出してきました。時代に応じて比類ない存在感を示し、高い評価を得てきました。五百年以上前にはすでに「わが国の至宝」とも評されていました。しかし、こうした享受の歴史は作品の権威化をもたらします。研究者を含めた読者が、『源氏物語』を不可侵の聖なる存在として崇めるようになるということです。だからこそ、私たちは無意識に、あるいは無条件に「この物語は自己完結した、完成度の高い、評価に値する作品だ」という前提に立っていないか、「いかにすばらしいか、どれほど優れているか」を語ることにデフォルトになってしまっていないか、問い直してみる必要があります。

私の関心は、「『源氏物語』がすばらしいとすれば、それはどのようにして達成されているか」を分析的に解き明かすことにあります。そのための視座として設定したのが「物語社会」です。「物語社会」は、物語の表現世界(語り手によって語られる世界)を社会学的な想像力を補助線にして捉え直す時に現象する、現実感のある社会を指します。この現実感が多くの読者を惹きつけ、多様な文化を生み出すことを可能にしている、というのが私の仮説です。些細なもの、何気ない日常的なことに留意しながら、『源氏物語』の現実感がいかに達成されているかを解明する「物語社会学」を参考に、物語との距離感を適切かつ自在にとりつつ、魅力の創発する現場を探る愉しみを味わっていただければと思います。

Contents

- P.3 1. 物語作者・紫式部とは
- ◆ 手がかりとしての『紫式部日記』
 - ◆ 『源氏物語』を読む男たち
 - ◆ 〈他者語り〉と〈自己語り〉
- P.4 2. 物語社会学とは
- ◆ テクストの求心力／遠心力
 - ◆ 表現世界を「社会」として捉えてみる
 - ◆ 物語の内と外を結合する
 - ◆ ありふれた噂、日常的な会話
- P.5 3. 私たちにとっての『源氏物語』とは
- ◆ 「宇治」を見つめるまなざし
 - ◆ 問いかける『源氏物語』
- P.8 龍谷大学大宮図書館2023年度特別Web展観
- 龍谷大学概要



伝谷文晁 筆「紫式部図」(東京国立博物館所蔵)

Profile

安藤 徹(あんど う とおる)



龍谷大学副学長、文学部教授。日本初の仏教総合博物館「龍谷ミュージアム」の館長も兼務。専門は日本古典文学、特に平安朝文学。『源氏物語』を主な対象として、自身が提唱する「物語社会学」の構築を目指す。龍谷大学(龍谷エクステンションセンター:REC)が展開する生涯学習講座「龍谷アカデミックプラザ」のほか、宇治市源氏物語ミュージアムをはじめとする自治体主催の生涯学習講座等の講師も、依頼に応じて積極的に担当している。

主な研究業績

『源氏物語と物語社会』(単著・森話社、2006年)、『日本文学からの批評理論 亡霊・想起・記憶』(共編・笠間書院、2014年)、『龍谷大学善本叢書 三条西公条自筆稿本源氏物語細流抄』(責任編集・思文閣出版、2005年)ほか

〈 当資料のお問い合わせ先 〉

龍谷大学 学長室(広報)

Tel 075-645-7882 E-Mail kouhou@ad.ryukoku.ac.jp

1. 物語作者・紫式部とは

◆ 手がかりとしての『紫式部日記』

まずは、『紫式部日記』から浮かび上がる紫式部の人物像を探ってみましょう。

紫式部は『源氏物語』の作者としてあまりにも有名です。『源氏物語』を読んだことがなくても、作者が紫式部だと答えられる人はたくさんいることでしょう。では、紫式部とは実際にどのような人物だったか？ と問われるとどうでしょうか。

すでに述べたように、紫式部の人生は生没年も含めてあまりよく分かっていません。父は当時有数の学者であった藤原為時で、母は紫式部が幼いころに亡くなったようです。父が越前守に任じられて下向した際には同行し、帰京後に父の同僚でかなり年の離れた藤原宣孝と結婚します。翌年、娘の賢子(大式三位)を産むものの、まもなく夫は疫病にかかって急死してしまいます。こうして、ほんの数年の結婚生活を経てシングルマザーとなった紫式部が書き始めた物語、それが『源氏物語』だと言われています。彼女が藤原道長の娘、中宮彰子に出仕することになったきっかけは、物語作者としての文才を道長が認めたからであろうと考えられます。彰子に出仕後も、紫式部は物語を書き継いでいったはずですが。

さて、この紫式部のことを知るための最も有力な手がかりは、『紫式部集』と『紫式部日記』です。特に『紫式部日記』は、物語作者としての紫式部を考える上で欠かせない作品として、江戸時代以来重視されてきました。

日記の中心は、中宮彰子が寛弘5年(1008)9月に産んだ敦成親王(のちの後一条天皇)の誕生記録です。加えて、二人目の皇子である敦良親王(のちの後朱雀天皇)の誕生五十日の祝いが行なわれた同7年(1010)正月までの断片的な記事なども見えます。書かれているのは、かなり限られた期間のできごとや宮仕えの様子です。とはいえ、そこには貴重な情報が含まれています。一つは、『源氏物語』に関する記事が複数あるということです。さらに、記事が単なる記録にとどまらず、さまざまなかたちを経験し、書き記した主体である紫式部の特徴や個性を物語るものになっている点も見逃せません。また、記録的な部分とは異質の「消息文的部分」と言われる記事もまた、紫式部のイメージ形成に決定的な役割を担ってきました。これらが相俟って、『源氏物語』の作者・紫式部は一つの像を結び、成型されることとなります。



井芥一二模「紫式部日記絵巻(模本)」(東京国立博物館所蔵) *敦成親王五十日の祝宴で酔い痴れる公卿たち(藤原公任ら)

◆ 『源氏物語』を読む男たち

日記中の『源氏物語』関連記事の一つに、寛弘5年11月1日に催された敦成親王の誕生五十日の祝宴場面があります。宴に参加していた藤原公任が、女房たちが控えている几帳の奥に向かって声をかけます。

左衛門督、「あなかしこ、このわたりに若紫やさぶらふ」とうかがひたまふ。「源氏に似るべき人も見えたまはぬに、かの上はまいていかでものしたまはむ」と聞きゐたり。

〔公任が〕「失礼ですが、このあたりに若紫はおいでか」とおっしゃっておのぞきになる。〔私は〕「光源氏に似ていそうな人もお見えにならないのに、ましてあの紫の上がどうしていらっしゃろうか」と思いながら、じっと聞いている。

公任の発言に見える「若紫」とは、『源氏物語』に登場する紫の上の呼称です。むろん、この場に虚構世界の人物などいるはずがなく、文字どおりに受け取れません。この発言が意味を持つのは、紫の上が登場する『源氏物語』の作者である紫式部への呼びかけである場合だけでしょう。つまり、紫式部を彼女が書いた物語の女主人公に擬してみせたということです。対する紫式部の反応もまた、こうした公任の意図を理解したからこそそのものです。このエピソードは、「紫式部」という名の由来を考える上でも注目されます。

それだけではありません。少なくとも寛弘5年の段階で『源氏物語』の一部は成立していて、すでに読者を得ていたことを証すものとしても貴重です。五十四巻からなる長編の『源氏物語』は巻単位に書かれ、読まれ、評判になり、それを受けてさらに書き継がれ、読み継がれていったものと考えられています。そうした物語の成立と享受のありようをかいま見せてくれるのが、公任の発言なのです。ちなみに、この記事を根拠に2008年に「源氏物語千年紀」事業が催され、11月1日が「古典の日」に制定されたのでした。

公任は、『大鏡』に「三船の才」の逸話が載るほどの才能を有する、当代随一の文化人でした。一方、政治的な権力を掌握していったのが、公任と同年齢の藤原道長です。彼もまた『源氏物語』の読者であり、作者・紫式部の文才に期待した人でした。『紫式部日記』には道長と式部との和歌のやりとりが記されています。

源氏の物語、御前にあるを殿のご覧じて、例のすずろごとども出できたるついでに、梅の下に敷かれたる紙に書かせたまへる。

すきものと名にし立てれば見る人の折らで過ぐるはあらじとぞ思ふ
賜せれば、

「人にまだ折られぬものを誰かこのすきものぞとは口ならしけむ
めざましう」と聞こゆ。

『源氏物語』が中宮の御前にあるのを殿〔=道長〕がご覧になって、例によってたわいない冗談などを言い始めたついでに、梅の実の下に敷かれている紙にお書きになる。

「酸き物」の梅の実ではないが、「好き者」と評判になっているあなたのことを見る男たちが、あなたを手に入れずに通り過ぎることはあるまいと思う。

このような歌を賜ったので、

「どの人にもまだ靡いたことがないのに、一体誰がこの私のことを「好き者」と言いふらしたのだろう。心外な」と申しあげる。

道長は冗談口で紫式部に「あなたは好色な人と評判だ、実際いろいろあるのだろうか？」と絡み、あるいは戯れに「私はどうだ？」と言い寄るそぶりです。対して式部は、「あらぬ噂を立てているのは誰なの？(あなたでしょ?)」と切り返してみせます。こうした和歌の贈答のきっかけとして置かれているのが『源氏物語』です。男女の恋を巧みに描く物語の作者ならば当然、その筋に精通し、自身も好色にちがいない……という俗悪的な発想が、道長の歌の前提にあります。

日記の中にはさらにもう一人、『源氏物語』を読んでいる男性が登場します。一条天皇です。

内裏の上の、源氏の物語人に読ませたまひつつ聞こしめしけるに、「この人は日本紀をこそ読みたるべけれ。まことに才あるべし」とのたまはせけるを、ふと推し測りに「いみじうなむオがある」と殿上人などに言ひ散らして、「日本紀の御局」とぞ付けたりける、いとをかしくぞはべる。

帝が『源氏物語』を人にお読ませなさりながらお聞きになっていた時に、「この人〔=作者〕は「日本紀」〔=正史〕を読んでいるにちがいない。本当に学識があるのだろう」と仰せになったのを、〔左衛門の内侍という女官が〕咄嗟に当て推量で「(紫式部は)たいそう学識がある」と殿上人などに言いふらして、「日本紀の御局」というあだ名を付けていたのは、とても滑稽なことです。

時の帝までもが読者であったというエピソードは、『源氏物語』が成立当時からいかに多くの人に読まれ、高く評価されていたかを象徴的に伝えています。しかも、物語に潜む歴史にまなざしを向ける帝の姿を描くことで、『源氏物語』が単なるフィクションを超えた価値ある言語表現としてあることさえ主張しているように読みなされます。

このように、それぞれの立場で時代を代表する三人の男性たちが、いずれも『源氏物語』の読者だったのです。彼らの存在を語ることは、それ以外にもどれほど多くの読者がいたかを想像させるに十分な効果を発揮します。また、三人とも物語作者への強い関心を示している点も興味深いところです。それほどまでに『源氏物語』の登場が同時代に大きなインパクトを与えたということなのでしょう。

◆ 〈他者語り〉と〈自己語り〉

ただし、これらの記事を書いたのが紫式部自身であるという点には注意が必要です。

日記の中の「消息文的部分」には、同時代に活躍した和泉式部や赤染衛門、清少納言を批評するところがあります。例えば、一条天皇の中宮定子(道長の兄道隆が父)に仕えた女房で、『枕草子』の作者である清少納言について、「したり顔」に利口ぶって漢字をあちこちに使いながら書いているけれども実力不足だ、などと痛烈に批判していることは有名です。

一方で、自身については、「一」という漢字さえ書けないふりをするなどして、才能をひけらかさずに常に控え目であったのに、おのずと知られてしまうようになったと記しています。そう言いながらも、一流の男性たちをも読者として獲得した『源氏物語』の作者としての姿を刻印しているのもまた『紫式部日記』であり、日記作者である紫式部なのです。一体、本当の紫式部はどのような人だったのか、と読者に深読みを促すようなしなかけが、この日記にはありそうです。まんまと紫式部の術中にはまってしまった結果が、私たちが思い描く紫式部像である、というのは言いすぎでしょうか。

少なくとも一筋縄でいかないことはたしかです。だからこそ、『源氏物語』の作者にいかにもふさわしい人物のようも感じられるのでしょう。

『紫式部日記』を読んでいくと、行事記録や人物描写の的確さと「消息文的部分」における女房批評に見られるような人物把握の鋭利さとが相俟って、日記作者による〈他者語り〉の質の高さが強く印象づけられます。そうした他者に対する鋭い洞察力と精確な描写力が反転して自己に向けられることで、内面へと至る深度のあるまなざしによる〈自己語り〉になります。この日記は、〈他者語り〉と〈自己語り〉とが相互補完的に作用し、作者主体の特異な個性を生み出しているのです。

重要なのは、こうした『紫式部日記』における〈他者語り〉と〈自己語り〉が、『源氏物語』の作者・紫式部がいかにしてこの物語を作ることができたのかを解き明かす鍵になるということです。

「このように現実を捉え、自己を見つめることのできる紫式部だからこそ、あの『源氏物語』を書くことができた」と考え、『源氏物語』を読み解く手がかりは『紫式部日記』にあり、日記作者である紫式部の個性と才能にある」と発想する理路が見えてくるのです。言い換えれば、物語作者としての紫式部像は『紫式部日記』において形作られ、それが『源氏物語』の読みにも一定の影響を与えてきたのではないかと思うのです。

『紫式部日記』を通して『源氏物語』作者としての自己成型を遂げる紫式部。しかし、それはあくまでも日記から浮かび上がる一つのイメージです。私たちは、日記を別の観点から読み直すことで、新たな紫式部像を探り当てられるかも知れませんが、紫式部像に縛られることなく『源氏物語』の表現世界を探索することも可能です。

大河ドラマの放送を機に、紫式部関連の本や雑誌がたくさん出版されています。そこに描かれ、説明される紫式部についても無条件に鵜呑みにせず、史実として確認可能な実像と想像／創造的な虚像とを腑分けしつつ読み解きながら、あなたなりの紫式部を思い描いてみる、そしてあなたなりの『源氏物語』の世界を味読するのも楽しいのではないのでしょうか。

2. 物語社会学とは

◆ テクストの求心力／遠心力

『源氏物語』が八百年以上にわたって研究の歴史を紡ぎ、多種多様な成果を生み出してこられたのは、何よりも多くの読者がいたからです。平安時代の物語の大半が散逸してしまった中で、『源氏物語』がいまに伝わるのは、「この源氏の物語、一の巻よりみな見せたまへ」（この『源氏物語』を第一巻からすべて読ませてください）と仏に願い、物語を読み耽った『更級日記』の主人公のような読者たちのおかげです。それぞれの時代において、さまざまな読者が何らかの魅力を感じたからこそ、『源氏物語』は読み継がれ、文化を創造してきたと言えます。

では、この物語はいかにして多くの読者を惹きつけてきたのでしょうか？『源氏物語』の「求心力／遠心力」という観点から考えてみましょう。



土佐光貞が「源氏物語絵巻」篝火巻（龍谷大学大宮図書館蔵） * 玉鬘と歌を交わして言い寄る光源氏

『源氏物語』は先行する作品や歴史、文化などを貪欲に引用し咀嚼・吸収しながら、独自の物語世界を作り上げている「引用の織物」です。そうして織りなされて文様として浮かび上がってくるのが、例えば主人公の光源氏です。彼はけっして孤高の存在ではなく、『竹取物語』のかぐや姫の系譜に連なる光り輝く主人公であり、歴史上の人物をも複合的に想起させる登場人物です。読者は、そうした関係の編み目の中にこそ光源氏の唯一無二性を見出すのです。

こうして編み込まれた表現世界が、読者を強く惹きつける力をも発揮していると想定されます。一方で、この物語は多くのテキストに引用・変奏され、関連する言説群に影響を与えながら、文化や歴史を生み出し、政治・経済にもかかわってきました。

つまり、内部へと引き入れる「求心力」と、外部に作用して何ごとかを創造していく「遠心力」がともに強いところに、このテキストの特徴があります。求心力と遠心力はまったくの別物というわけではあ

りません。求心力の強さが遠心力を生じさせ、遠心力が発揮されることで求心力がさらに強化されるといった相互作用も見逃せない点です。『源氏物語』に惹きつけられ、その表現世界を経験し、經由しながら外部へと開かれ、それがまた物語そのものへの関心を惹起し、テキストへと引き寄せます。こうした求心力／遠心力が『源氏物語』の卓越性を解き明かす鍵の一つではないかと思われます。その核心にあるのは、やはり読者を吸引する力でしょう。

ここで一つの仮説を立ててみます。それは、「テキストの現実感が求心力／遠心力の強さを保証している」というものです。『源氏物語』はあくまでも「そらごと」(事実でないこと、根拠のないこと)を語る物語です。作者の紫式部自身が『紫式部日記』で書いていたように、主人公の光源氏が実在するはずもありませんし、彼が築いた「六条院」という大邸宅も空想の産物にすぎません。そのような虚構の世界が、しかし読者にとってアクチュアルなものとして現勢化するとき、大きな求心力／遠心力を発揮すると考えてみます。そうすると、問うべきは「『源氏物語』の現実感とはどのようなものか」、そして「その現実感がいかにして達成されているか」ということになります。

◆ 表現世界を「社会」として捉えてみる

さて、私たちが何かに対してたしかかな存在感を覚えるのはどのような時でしょうか？

社会学の知見によると、ふだんは特に意識することのない「社会」の存在が実感されるのは、抵抗や違和などを経験した時です。また、直接的で人格的な「二者関係(私とあなた)」に対して、その関係を客観化する第三者の存在を含めた「三者関係」が成立することで、個々人には還元できない「社会」の存在が認知され、形成されるとも言います。

こうした社会的な(特に方法論的關係主義や現象学的社会学と呼ばれるものの)想像力を参考にしつつ、『源氏物語』の表現世界を「社会」として捉え直す時、私に言う「物語社会」が現象します。物語社会とは、物語を生きる作中人物たちの何気ない日常的な相互行為などによってその都度達成、構築される、しかし確固とした秩序がある(ありうる)と感じられるようなアクチュアルな社会を意味します。この物語社会に焦点を合わせ、微細なものや日常なこと、当たり前のように見えるものごとを対象化しながら、虚構のテキストである『源氏物語』がいかにして現実感を達成しているかを明らかにしようとするのが、私の構想する「物語社会学」です。



ここで留意しておきたいのは、物語社会と現実社会(歴史社会)との関係です。

フィクションである物語社会は、原則として現実社会と位相の異なる社会ですから、現実なり歴史なりを直接持ち込み、それらを固定的な基準・参照点にして物語社会の現実感を測定できると考えるのは、強すぎる仮定です。とはいえ、物語社会と現実社会はまったく異質で排他的な関係にあるわけでもありません。物語には現実と完全に切り離された独自の社会があり論理があると考えられるような、虚構／現実の二分法もまた強すぎる仮定だということです。物語社会の現実感は、現実を反映することで達成されるのでもなければ、現実と無関係に達成されるのでもないのです。大事なのは、現実社会を分析する社会学的まなざしを補助線として表現世界を社会として記述する中から、現実感のありかを探り当てることだと考えています。

現実社会に生きる読者は、物語社会の現実感を媒介にして、現実とは異なるもう一つの複雑な社会、ありえたかもしれない、あるいは今後ありうるかもしれない社会を経験します。実在するかのような生き生きとした、しかし間違いなくヴァーチャルである物語社会に遊ぶことは、現実社会を読み解き、捉え直すレッスンにもなるのではないのでしょうか。

◆ 物語の内と外を節合する

求心力／遠心力という観点からは、『源氏物語』の語り手が語る現実感のある社会としての物語社会とは別に、テキストの外に広がるもう一つの物語社会を想定することも可能です。つまり、『源氏物語』について語る社会、『源氏物語』が流通する社会という意味での物語社会です。前者を「物語内社会」と呼ぶとすれば、後者は「物語外社会」と表現できるでしょう。

引用する『源氏物語』は、多彩に引用されるテキストでもあります。強力な遠心力によってさまざまな作品に影響を与え、新たな文化を生み出し、政治的に利用され、経済的な効果も発揮してきました。

例えば、国宝の徳川・五島本「源氏物語絵巻」をはじめとする「源氏絵」をご覧になったことのある人も多いでしょう。現代では、マンガやアニメ、ドラマ、映画なども制作されています。デザインのモチーフになったり、地域おこしに活用されたりもしています。

こうした文化的な展開も含め、『源氏物語』は社会の中で語られ、見られ、活かされ、変形・変奏しながら流通してきたのです。虚構にすぎない『源氏物語』が現実社会に作用し、テキストの外部に物語による、あるいは物語をめぐる社会を編成してきたのだとも言えます。物語外社会を視野に入れることは、時を重ねるにつれて文化的な権威を高めていった『源氏物語』が現実社会において果たしてきた役割とは何か、どのような権力作用を発揮していかなる社会を構築してきたのか、といった問いをも招き寄せるはずで

物語外社会において千年にわたって紡がれてきた、『源氏物語』に関する膨大な文化や言説は、物語内社会と無関係ではありません。安易に接続させることはできないにしても、テキスト内外の二つの物語社会の節合の可能性を探る中から、テキストの求心力／遠心力のダイナミズムと物語社会の現実感のありようをトータルに解きほぐす手がかりを見出すことができるのではないか、というのが私なりの見通しです。

ちなみに、紫式部は『源氏物語』の奥底ではなく、テキストの内と外の境界においてこそ機能する存在と見定めることで、作者と読者の関係を整理し直すこともできるように思います。私たちは、あまりにも「作者の言いたいことは何か」という問いに縛られすぎています。

◆ ありふれた噂、日常的な会話

私がこれまで注目してきた具体的テーマに、物語社会に流通する噂と作中人物たちの会話があります。光源氏と彼の邸宅「六条院」を例に少し説明します。

「世になくきよなる玉の男御子」(桐壺巻)として誕生した光源氏は、現実離れした超越的な美質を持つ人物として登場します。しかし、実際に語られる光源氏は、理想性を体現しつつも、完全に偶像化されることなく、他の人びととともに関係の編み目の中に絡め取られ、苦しみ悩みながら、物語社会を何とか生き抜く人物としてあります。

例えば、光源氏は、頭中将と夕顔の子である玉鬘を実の娘ということにして、みずから造営した六条院に引き取ります。そして、玉鬘の噂を世間に広め、求婚者たちを惹きつけることで、六条院にさらなる栄華をもたらそうとします。ところが、実際には血の繋がらない玉鬘に対して懸想心を抱き、言い寄るようになります。むろん、そのような密かな思いと微妙な関係を世間に知られるわけにはいきません。光源氏は、噂をうまく管理・利用して世の中を支配しようとしつつも、結局のところ噂を恐れ、噂に翻弄され、世の中に絡め取られるほかありません。しかし、噂を通じた世の中との関係をも語ることで、六条院はたしか存在感を示しているのです。

光源氏が主宰する六条院の秩序は、日常的な会話によっても維持されています。四つの邸から構成される六条院は、それぞれの邸に女主人を据えた上で、光源氏を中心とした調和のとれた「女の世界」を形成します。それは、もう一つの後宮とも言えそうな、現実離れした特異な時空としてありました。光源氏がこの六条院の中心、さらに世の中の中心としてありつづけるためには、六条院の女性たちとの会話による関係の構築と維持が欠かせません。玉鬘を相手に光源氏が「物語とは何か」を論ずる「螢巻の物語論」と呼ばれる場面があります。そこでの光源氏は、さまざまな方法を駆使して会話を展開し主導する中で、男女間の権力関係を隠微な形で成り立たせることに成功します。こうした日常的な行

為を通過作業のように繰り返しながら、かろうじて維持される秩序空間として語られるのが六条院なのです。

『源氏物語』における光源氏の現実感、実在のモデルがいるとか、作者が実際に経験したり感じたりしたことに基づいて造型したとか、特別な思いを込めて描いたとかいったことは直接かかわりません。問題なのは、光源氏が物語社会を生きる人間としていかに語られ、関係づけられているかです。それを、ありふれた社会現象である噂や日常的な実践行為である会話の分析などを通じて明らかにしていくのが物語社会学です。

3. 私たちにとっての『源氏物語』とは

◆ 「宇治」を見つめるまなざし

昨今、マンガ・アニメなどのファンが自分の好きな作品に関連する場所を訪ねる「聖地巡礼」が盛んです。大河ドラマ「光る君へ」の放映開始で、滋賀県大津市の石山寺や福井県越前市の紫式部公園など、紫式部や『源氏物語』ゆかりの地を「聖地」として訪れる人も増えていることでしょう。これもまた、物語外社会の一例です。

「源氏物語のまち」と銘打つ京都府宇治市も『源氏物語』の聖地の一つ。宇治の歴史を繙くと、物語との深い関係に目を引かれます。

物語最後の巻々、いわゆる「宇治十帖」の舞台となった宇治は、遅くとも16世紀の終わりごろには『源氏物語』に関する史蹟も整備されつつあったようです。江戸時代になると、『源氏物語』の舞台として観光地化が進みました。

こうした『源氏物語』ゆかりの地としての宇治のイメージは、かなり早い段階で定着していたと思われます。先に引用したように、『更級日記』には『源氏物語』を耽読する菅原孝標女の姿が描かれています。熱心な『源氏物語』ファンだった孝標女は、奈良の長谷寺参詣へ向かう途中、宇治川を渡る際に、次のような感慨に耽ります。

紫の物語に宇治の宮の娘どものことあるを、「いかなる所なれば、そこにしも住ませたるならむ」とゆかしく思ひし所ぞかし。「げにをかしき所かな」と思ひつつ、からうして渡りて、殿の御領所の宇治殿を入りて見るにも、「浮舟の女君のかかる所にやありけむ」など、まづ思ひ出でらる。

「紫の物語」に宇治八の宮の娘たち〔大い君、中の君、浮舟〕のことが書かれているのを読んで、「他でもなくそこ（宇治）に姫君たちが住む設定にしたのは、どのような所だからだろうか」と見たいと思っていた所であるよ。「本当に美しい所だな」と思いながら、何とか対岸に〔舟で〕渡って、殿〔＝藤原頼通〕の御所有地である宇治殿〔のちの平等院〕に入って邸内を見るにつけても、「浮舟の女君はこのような所にいたのだろうか」と真つ先に思い出される。

孝標女にとって宇治と言えば、まず何よりも『源氏物語』宇治十帖でした。眼前の風景はおのずから物語の世界と重ね合わされ、物語を想起するよすがとなっています。まさに『源氏物語』あつての宇治。

もちろん、『源氏物語』が書かれる以前から、宇治は歴史・神話・文学の舞台となってきました。例えば『古事記』や『日本書紀』によれば、応神天皇の皇子で、兄の仁徳天皇と皇位を譲り合った菟道稚郎子は、宇治に宮を構え、その地で亡くなったとされています。彼はいまでも、現存する日本最古の神社建築である宇治上神社(国宝、世界文化遺産)に祀られています。

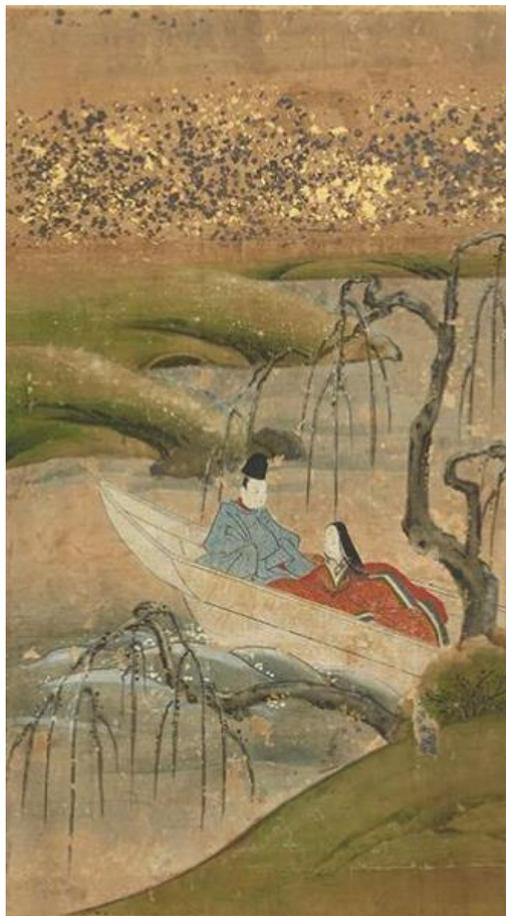
あるいは、『百人一首』でも有名な喜撰法師の「わが庵は都のたつみしかぞ住む世をうち山と人は言ふなり」は、宇治を詠んだ代表的な和歌として『古今和歌集』の時代から有名でした。じつは、これらをも貪欲に引用し、喚起するイメージを吸収しながら物語世界を創り上げているのが、『源氏物語』の宇治十帖なのです。宇治を見つめる視座となる『源氏物語』の中に、すでにさまざまな宇治の地の記憶や心象が溶け込んでいると言えるでしょう。

宇治山と宇治川と宇治橋が織りなす独特の風景は、いまでも私たちの心を惹きつけてやみません。しかし、それは単純に美しいからではなく、知らずに『源氏物語』というコンタクトレンズをつけて見ているのかも……。千年近い時間を越えて、孝標女とともに私たちもまた、『源氏物語』の世界を通して宇治を見る(あるいは宇治の地を通して物語の世界に遊ぶ)という経験ができるのです。

この物語はいまも生きています。

「源氏物語屏風」浮舟巻(龍谷大学大宮図書館所蔵)

* 小舟で宇治川を渡る匂宮と浮舟



◆ 問いかける『源氏物語』

なぜ『源氏物語』は千年にわたって読み継がれてきたのか？ それを解き明かす手がかりが物語社会の現実感にあるのではないかと、というのが私の基本的な発想です。

社会はいつだって複雑です。まるごと理解しようにも掴みがたく、課題が分かっているが簡単に解決できないこともよくあります。それでも理解し解決しようとする時、つまり答えを求めようとして、私たちがしばしば取る手段が「単純化」です。しかし、単純化によって見捨てられて、こぼれ落ちてしまうものもあります。均質で排他的な空間へと歪めてしまう危険もあります。

『源氏物語』はけっして単純な社会を語っていません。400人を超える登場人物は誰一人として同じ人生を歩んでいませんし、人びとの関係も多種多様で、立体的かつ多層的な文様を綾なしています。幸か不幸かの線引きも簡単ではなく、勝者と敗者が綺麗に分かれるわけでもありません。好きか嫌い、愛しているのか憎んでいるのかさえ一概には言えません。

物語社会もまた複雑なのであって、あらずじだけでは掬い取れないものがたくさんあります。作家の高橋源一郎さんがおっしゃっているように、文学とは「複雑なものを複雑なまま理解しようとする試み」(『丘の上のバカ』朝日新書)なのです。

複雑なものを複雑なまま語る『源氏物語』は、読者に分かりやすい答えを与えてくれるようなテキストではありません。むしろ、問いかけてくるテキストです。物語の最後に登場する女主人公の浮舟が周囲から問われつづける女性として描かれていることはとても象徴的です。問われることに苦しみ、答えることのない彼女の存在は、一問一答的に問い、答えを求めることの困難さを浮かび上がらせています。読者もまた、こうした登場人物たちに共感したり反発したりしながら、現実とは異なるもう一つの社会を生きる中で、いろいろと問いかけられる経験をするでしょう。

物語の登場人物の一人に、明石の君という女性がいます。彼女は光源氏との間に姫君(のちに中宮)を産み、一族の栄華に貢献します。光源氏との身分差を自覚しつつ、謙虚に、しかし矜持を持って生き抜く女性で、物語社会の人びとは「幸ひ人」と呼んだりもします。読者は明石の君を「女のあるべき生き方」を示した女性として、一つの答えのように受け止めるかも知れません。実際、そういう捉え方がなされることもありました。しかし、「答はいつまでも間に満ちた答である」(『パスカルにおける人間の研究』岩波文庫)という哲学者・三木清の言葉のとおり、一見すると答えのようで、そこには問いが満ちています。世間からは幸せな人と見られている明石の君は、最も悩み苦しんだ女性でもありました。そのような生き方が本当に理想的でしょうか？ 仮に理想的だとして、それは誰にとっての理想なのでしょう？

近年、「ネガティブ・ケイパビリティ」が注目されています。「性急に証明や理由を求めずに、不確かさや不思議さ、懐疑の中にあることができる能力」(帚木蓬生『ネガティブ・ケイパビリティ』(朝日新聞出版))、「判断を保留し、宙ぶらりんのまま考えつづける力」(鴻巣友季子『文学は予言する』新潮社)のことです。

『源氏物語』の物語社会を生きる登場人物そして読者は、ネガティブ・ケイパビリティによって問いを生きる。そう表現してもよさそうです。『源氏物語』を読む、それは物語と対話することであり、テキストに問いかけ、テキストから問いかけられることです。その中で、安易に答えを出さずにじっくり問いと向き合い、考えつづける経験、あるいは視点を換え、焦点をずらしながら読み換え、問題意識を深めていく経験のできるのが、この物語の魅力の源泉になっているのではないのでしょうか。

私たち読者は、『源氏物語』に問い、物語社会を読み解きながら、逆に自身を問い、読み直すことを促されているのです。むしろ、問いの内容や問われ方は時代によって異なることでしょう。他にもなく、いまここを生きる私たちには、私たちなりの問いがあり、私たちだからこそ問われることがあるはずです。複雑で現実感ある『源氏物語』は、常に誰にとっても正解になるようなものを見せてくれるわけではありません。しかし、誰に対しても開かれ、常に問いかける物語です。

あなたには、『源氏物語』からどんな問いが聞こえてくるのでしょうか。

□ 龍谷大学大宮図書館 2023年度特別Web展観 〈紫式部〉の物語

2023年度の特別展観では、龍谷大学大宮図書館所蔵の貴重資料を通して、“『源氏物語』作者という物語”を生きる〈紫式部〉を多面的に紹介しました。2024年度以降も、Web展観は龍谷大学図書館HPで閲覧可能です。

具体的には、①〈紫式部〉を生み出した物語、②〈紫式部〉が生み出した物語、③〈紫式部〉が生み出した物語を支える物語(としての仏教)、④〈紫式部〉をめぐる物語としての伝説、⑤視覚化された〈紫式部〉の物語、という5つの視座を据えて、みなさんを目眩く物語の世界へとといざないます。

※ Web展観

https://opac.ryukoku.ac.jp/iwjs0005opc/htdocs/2023_murasakishikibu_prod/index.html

□ 龍谷大学概要



龍谷大学は、1639年に京都・西本願寺に設けられた「学寮」に始まる9学部、1短期大学部、10研究科を擁する総合大学です。私たちは、「自省利他」を行動哲学として、地球規模で広がる課題に立ち向かい、社会の新しい可能性の追求に力を尽くしていきます。

本部機能は京都の深草キャンパス、学長は入澤 崇(いりさわ たかし)

- 大宮キャンパス(京都) 文学部(3、4年生)
- 深草キャンパス(京都) 文学部(1、2年生)／心理学部(1、2年生)／経済学部／経営学部／法学部／政策学部／国際学部／短期大学部
- 瀬田キャンパス(滋賀) 先端理工学部／社会学部／農学部



**RYUKOKU
UNIVERSITY**

龍谷大学ホームページ <https://www.ryukoku.ac.jp/>

龍谷大学の歴史 <https://youtu.be/F3l3pzRMuA8>